西照

西照寺寺報「さいしょう」
第２５号
2009年10月9日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40
西照寺ホームページ　nisitera.eek.jp

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講をお勤めいたします。
お参りくださいませ。

おつとめの時間

十月二十一日(水)　午後二時(逮夜)～
午後七時(初夜)～
二十二日(木)　午前九時(晨朝)～
午前九時半(満日中)～

布教使　林　史樹　師(高岡市伏木　要願寺住職)

西谷山　西照寺

報恩講のお斎（御膳）は、２１日だけです。
２２日はございませんので、ご留意ください。

正信偈のはなし　第二話

帰命無量寿如来（無量寿如来に帰命し）
南無不可思議光（不可思議光に南無したてまつる）

阿弥陀と音写されたサンスクリットの原語には、無量寿（いのちが無限である）と無量光（ひかりが無限である）という二つの意味があります。

今親鸞聖人は、阿弥陀仏のお徳を無量寿という側面から見た尊称「無量寿如来」と、無量光という側面から見た尊称「不可思議光（如来）」を用いて讃歎されています。ともに阿弥陀仏のことをあらわしています。別なことではありません。私でしたら、家族から見たら「お父さん」、門信徒から見たら「住職」、仏法に帰依した者の立場から見れば「釋教潤」とそれぞれの見方によって呼び方は違いますが、中身は一緒です。そのようなことではないかと思います。

それでは、何故はじめに二つの名前を挙げて讃歎されたのでしょうか。そこには、南無阿弥陀仏の心を明らかにしたいという、意図が伺えます。

先ず、「無量寿如来」とは、「無量寿」はいのちに限りがないということですが、何のために無量寿の身になられたのかといえば、過去・現在・未来にわたって永遠に悩める人々を救うためです。そこで、そのお心は、慈悲の精神から来ているので、無量寿とは、阿弥陀仏の慈悲をあらわすようになりました。「如来」は、仏のさとりの世界を「真如」とか「一如」といいますが、その真実から来た方という意味になります。

仏教では、自ら修行してさとりを開くという方向の時には「仏」と言い、その悟りの世界から迷える人々をすくうためにはたらく方向の時には「如来」と表現するようです。

次に、「不可思議光」とは、「不可思議」は、神秘的ということではなくて、人間の思議（思い計らい）をはるかに超えたという意味です。「光」は、光が暗闇を照らし出すように阿弥陀仏の光は、ものごとの真実を照らし出すということで、智慧（真実を明らかにするちから）をあらわしています。

南無阿弥陀仏には、このような阿弥陀仏の限りない智慧（光）と慈悲（寿）のはたらきが込められていました。

そして、この限りない真実の智慧でいのちの全体を見通すと、生きとし生けるものは、みな独立して存在するのではなくて、互いに関わり合い支え合いながら存在していることに気づかされます。縁起的存在ということです。

私の分かりそうな範囲で考えてみると、私は決して自分一人で生きているのではありません。家族や友人や地域の人とか、門信徒の皆さんなど多くの方々との関りの中で生き、支えられています。動植物や大自然のめぐみなどもそうでしょう。どれが欠けても今の私というあり方の命は成り立ちません。ある意味では私の命の一部を占めているとも言えるでしょう。例えば、自分の子供は、別々の命を生きているように思いますが、子供に事故などが起こると心配で食事もままならない。やはり、自分の命の多くの部分を占めていたことに気づかされます。

このように、真実の智慧の光で、いのちを見通すと、生きとし生けるものはみんな関わり合い、繋がっている。大きな一つのいのちを生きていたということに気づきかされます。

親鸞聖人はそこのところを「一切の有情（うじょう）はみなもつて世々生々（せせしょうじょう）の父母・兄弟なり」（歎異抄第五章）、あらゆるいのちは生まれ変わり死に変わりして、自分と繋がっていた。父母兄弟のようないのちを生きていたとあらわされています。

そして、そのように気づくと、自分に関わっているいのちを、自分のことのように尊重し大切にしていこう、相手の悩みを何とかしてあげたいという心が湧いてきます。

私なども、知らない人に会うと「私とは関係ない」と思いがちですが、「吉久に親戚がいる」などと言われると急に親しみや何か一つに通じるものを感じることがあります。それはあったのだけれども今までは見えなかった、その人との関係性が見えてきたからです。

阿弥陀仏は、あらゆる命とのつながりを見通す中から、慈悲の心を起こされました。慈悲というと、何か上の立場の者が下の者に恵を与えるようなイメージでとらえられがちですが、本来は「同体（どうたい）」とか「一体（いったい）」という意味です。我（わ）がことのように一つに見ていくということです。別な言葉でいえば、無条件の愛情という表現も出来るでしょう。

父母兄弟の如く一人ひとりの命を大切に思い、尊重していく精神です。

観無量寿経（かんむりょうじゅきょう）には「仏心（ぶっしん）とは大慈悲（だいじひ）これなり」と説かれています。その慈悲心から、お念仏一つで、すべての命の輝きが尊重され、互いに認めあえるような社会（浄土（じょうど））に生まれさせて、救い取りたいという願い（本願（ほんがん））が出来てきたことを大無量寿経（だいむりょうじゅきょう）は伝えています。

このような阿弥陀仏の心が念仏に込めて、届けられているわけです。

ですから、念仏申していくということは、

（裏面に続く）

（中面からの続き）

阿弥陀仏の心の中にこそ真実があり、人間の依るべき生死を貫いていくような究極的精神があるという、仏からのメッセージをいただいていく営みであるとも言えます。

自由と平等と友愛

鳩山首相の政治的精神は、「友愛（ゆうあい）」であるということをよくテレビなどで耳に致します。

ご存知のように、フランス革命のスローガンは「自由と平等と友愛」でした。一人ひとりの自由と平等、いのちの尊厳を大切にし、尊重し合う社会を築いていこう。

長い歴史を通じて人々が求めて止まなかった「人権」という精神は、その後世界に広まり、今日では世界で共通の、また、人類の普遍的な理念として位置付けられています。

この自由と平等は、相対立する概念ですが、それを可能にするのが友愛という精神でした。友愛とは、以前は博愛とも表現されましたが、兄弟愛、人類愛のことで、あらゆる人々を父母兄弟のように見ていく愛情の心です。

ある人が、「念仏申して生きていくということは、自由と平等と友愛に生きるということだ」と言われた方がいました。なるほど、そういう言い方もできるなあと感心したことです。全くお念仏の精神と矛盾するものではありません。

お浄土こそ、完全に自由と平等と友愛が実現された社会（国）であり、念仏申すとは、そういう浄土を願って生きていくという決意でもあります。

（文責　住職）

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

催事案内

九月十九日から十一月三日まで、石川県立歴史博物館にて、京都西本願寺の国宝などの法物展が開催されています。

入館料は千円ですが、特別鑑賞券（八百円）というのがあります。ご利用の方は、お知らせください。